

「さらば 愛しき人よ」

牧草 泉

去っていく
あの人の後姿を見送りながら
悲嘆の涙にくれていた
チャンドラーを読んでいたら
大声で言えたのに
「さらば 愛しき人よ」と
それに気がつかずに
過ごした四十年
今になつて
おのれの女々しさを恥じる
あの時
さつぱりと別れの手を振つて
荒野を指していたら

人生は
もつと劇的な展開を見せたのでは？
鏡の中に老いが齒軋りしている
そして
ふと思ひ浮かべる
永遠に老いのない
あの人の美しい姿を

わが心の「サン・トワ・マミー」

「なんだって？ わざわざ東京まで？」

「だって テレビで見れるじゃない？」

「一人で？ あきれた」

「その歳で？ 先生の許可がでたの？」

「そうだよ いくつも薬を飲んでるのに」

「どうみても時間と金銭の浪費だよ」

「きつと 途中で救急車に乗換えだよ」

「メイワク爺さんになるよ」

「サークルで駄弁ってたほうが身のためだよ」

「もしや ボケがきた？」

でも 決めたんだ

彼女が「サン・トワ・マミー」を歌うんだ

なんてったって一番好きなシャンソン

越路吹雪の再来といわれる彼女

三分五十秒の至福の時間

誰がなんと言おうが 笑おうが

彼女のライブに行くんだ
二泊三日の夜行の旅を頭に描きながら
自転車に乗ってJR駅に向かう
年金生活者にやさしい
青春十八切符を求めて

次はお前だよ

曾祖父が亡くなった 葬式に行った

「次の次の次がお前だよ」

誰かが耳元でささやいた

でも 遠いお伽の国の物語だった

祖父が亡くなった

「次の次がお前だよ」

肌がぶるんと震えた

でもまだ時間があると思った

母が亡くなった 大往生だった

「次は、お前だよ」

大きな声でした

頬をドカーンと殴られた思いがした

ふと あの人を思い浮かべる

大阪かな？ 東京かな？

「私は覚悟ができてるわよ あなたは？」

耳元に風がそよいだ

あの人も同じ道をたどっているんだ

不安な心が緩解した

あの人の美しい浴衣姿が浮かんでは消えた

にっこり笑っていた

あの人がふとつぶやいた一言

「神はいないのよ」

なぜ この暗示が理解できなかつたのか

ふと齒軋りしたいような後悔の念がよぎった